

人はみな、天から与えられた 何ほどかの純金を持って生まれている。



吉田松陰 Shoin Yoshida (1830-1859)

その生き様、死に様は、
旧弊を一掃するにたる迫力に満ちていた。
昼は、小さな子供たちに読み書きを教える。
夜には年長者たちへ向け、
世界の大勢の中で日本の歩むべき道を
火を噴くような熱情をもって語り議論する。
「知と行は二つにして一つ」。
実践してこそ思想は生きる」と実践活動を重視。
その塾の名は〈松下村塾〉。そしてその主宰者こそ、
吉田松陰、その人に他ならない。
「学は人たる所以を学ぶなり」と、
人とはどうあるべきか、世の中で何を為すべきか
学問をしながら追究。
当時、藩校には藩士の子弟しか入校できなかった。
しかし松陰はすべての人間の可能性を信じ、
年齢や身分にかかわらず門戸を開放。
誰とも対等に接し、何よりも“対話”を重視。
門弟たち一人一人の人格を尊重し、各々の個性を
引き出していく。彼ほどその人本来の資質を
啓発していった人物が他にいたのだろうか。
久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文……、
維新回天の青年志士たちが巣立っていったのである。
松陰は天保元年(1830)、長州藩は萩、
半士半農の貧しい下士の家に生まれる。
幼年より農作業を手伝いながら、四書五経を勉強。
孟子の思想「民を貴しと為す」を心に、
その後現実社会の情勢を見定めるため諸国を周学。
江戸では佐久間象山に洋学を師事し、
その目は海外へと向けられていく。
鎖国により大きく遅れをとった日本の実情に
憂慮した松陰。迎えた安政元年(1854)3月、
「海外に学ばん」と下田沖に碇泊する
米艦への乗船を企図。ペリーはその心意気に
共感するも、幕府に気遣い拒否せざるを得ない。
密出国という国禁を犯した松陰は、投獄。
約1年半にわたる拘留。出獄の後、実家での
蟄居の身で〈松下村塾〉を開いたのであった。
しかしその間も外圧からの危機に優柔不断な幕府。
業を煮やしたこの不屈の志士は安政5年9月、
つい「時勢論」を提出。
「今こそ果敢実行、大義を行う時機である。
天下の大改革は時機を失えば成就しない」。
討幕論に走るその思想と影響力を恐れた幕府は、
松陰を再び投獄。そして翌安政6年(1859)
10月、処刑——吉田松陰、享年30歳。
「身はたとひ 武蔵の野辺に 朽ちぬとも
留め置かまし 大和魂」。果たして
この辞世の歌の通り、彼の魂は門下生たちが継承。
「人はみな、何ほどかの
純金を持って生まれている。天から与えられた
その金の純度を高めることが修養努力。
我々の学問も責務もここにあり」。
人材の宝庫である江戸や京を何するものぞと、
萩という片田舎の粗末な学舎から、一人一人の
人間に光をあて数多の逸材を輩出した松陰。
自らは日本の新しい夜明けを見届けること
叶わずも、その存在そのものこそ、時代が求めた
純粋なる精神エネルギーの発露であった。
昭和の歌人・吉井勇は詠う。
「萩に来て ふとおもへらく いまの世を
救わむと起つ 松陰は誰」

「子どもたちの 子どもたちの 子どもたちのために」